
ゼロの軍隊

にゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの軍隊

【Nコード】

N1097BA

【作者名】

にゃん

【あらすじ】

n番煎じの二次創作です お気を悪くしない程度に楽しんでください

仕切り直し（前書き）

仕切り直しでござる

仕切り直し

「まさか、裏切り者がいたとはな」

グリップを握る手がやけに冷たく感じる

「仕方がなかったんですよ。レナード大佐」

「黙れッ！！貴様のせいで散った命もあつたのだぞ！」

甲板が揺れ、上手く照準が合わない

「散るべくして散った命です」

「おのれえ！！」

銃声が鳴る

「残念ですね。レナード大佐。もうお歳でしょう？このまま退役してください」

非情にも天候は裏切り者に味方した

そして裏切り者は銃を取り出すと 眉間を撃ち抜く

「ご安心ください。後はこのエドモンド中尉が後を継ぎます」

.....

時は2400年の終わり

人類は増えすぎた人民の領土を求めた

食料難、埋め立て費用も馬鹿には出来ない

米国首脳は第三次世界を開始させた

領土を確保する為には西を滅ぼす必要があると そう言ったのだ
しかし、この戦争本来の理由を知るものは少ない 裏切り者エド
モンドも知るものの一人だ

彼はこの戦争を早期に壊滅へと追い込む為に他国の情報を漏洩させていた

彼は航空母艦でこの国でする最後の仕事をしていた

「時期が早まっちゃったじゃん。レナード君。君のせいだよ。わざわざ戦争を長引かせようだなんて、意地悪だなあ」

死体海へと投げ捨てるのにこやかに笑う

「一人でも多くの死人をつて言ったの大佐でしょ？悪く思わないでね？、ん？あれ？」

人が居ない ただそれだけだが、此処は海の上だ 居ない方が可笑しい

「なんだ？なんだ？霧？」

先ほどまでは母艦も揺れていたところを見ると不自然ではないが、人が消えたとあれば冷静さも失うというもの

「、クソが！さっきまでは上手くいったのに！コンパスもイカれて使えねえじゃねえか！」

叩きつけ破壊する様は狂人のそれだった

「ごめんね。アレクシア。約束したのに、、」

深い霧に包まれ母艦を発見する事は不可能になった

その後母艦が消息を断ち、情報を漏洩される危険性が無くなった現在 戦争は激しさを増し、人類の四割を亡くし 更地の確保に成功した

思い出

子供の頃はよく言われた　愛想良くしなさいと　嫌いな奴は嫌いだとどうして自由でいられないのだろう

（お前。名前は？）

忘れられない
彼女との出会い

（私？私はアレクシアよ。貴方の名前は？） 彼女はまさに女神の
ような女性だった 人当たりが良く、品行方正で 誰よりも

(平和が好きなの)

平和というものを心から望み、実現しようとした彼女の為に僕は何でもした

（無理に付き合わなくて良いのよ？）

彼女が好きだった 心から愛していた たとえ、叶わなくとも彼女の笑顔を守りたかった

彼女が死んだ　　予期していたかのように彼女は言った　　幸せに生きてと

分かってない！分かってない！

君といられる事が幸せなのに

いつしか僕は軍人になっていた。平和を愛した彼女のために、意思を受け継ぐために各方面の腹の内を知らなければならなかった。

そして辿り着いた 人民の削減を望んだ戦争

(八八八八八八八八八八八八八八八八)

自分が彼女が得ようとしたものは一体なんだったのか？ 解らなくなった

平和の壁は戦争

戦争の壁は人民

人民無くして平和など無い　しかし、甘んじて受けるのは嫌だ

（そうだ！そう死ぬのは軍人だけでいい。兵力を無くせば戦争など起こらない！）

自分がしたことが理解されないことくらい知っていた

軍人が軍人を殺すのは当然なのに、

僕を人殺しと呼ぶなら、同時に救いでもあった　人の心に他人を哀しむ余裕があるのだと

もう彼女は居ない　幸せも無い　だけど平和を創ることが出来る
誰にも邪魔はさせない　絶対に

（まさか、裏切り者がいたとはな）

ふう　やれやれ　人類の裏切り者が何を言うのやら

（貴様のせいで散った命もあつたのだぞ！）　当たり前だ　死んで
もらわねば困る　僕はそのためにいるのだからな

（後はこのエドモンド中尉が）

一人でも多く　一秒でも早く

契約の日

べきバキと音を發てる どうやら眠つてしまつたようだ

「ん。
はあ」

背伸びをし、立ち上がる。管制塔の窓ガラスに写った自分は、さっきまで泣いていたかのように目を赤くしていた。

「嫌な夢見ちゃったな」

出口に行く前に最後の晩餐でもしよう

良く見えなかつたがどうやら、陸に座礁したようだ。船員も居ないのだから逃げようがない。単機で逃げてもいいが此処がどこか解らない以上、下手な事はしないに限る。余計な事をして撃墜されては困る。食堂は暴れまわつたのか散らかし癖でもあるのか始末が悪かつた。

「、これが国を背負う軍隊かよ」

スープを啜り、チューインガムをポケットに仕舞うと、出口に向かった

艦内は閑散としていて、先ほど前まで作戦中だったとは思えないくらいだ

「うわ。高いなあ」

陸に乗り上げたため地面までは距離があった

「ふ、ふ、はあ、はあ、よいしょ！」

何とか無事に地面に降り立つと 辺りが海岸では無いことに気付く
「、、、どうしようか。アレクシア」

考えていても仕方ないので大人しく捕虜になろうと腕を頭の後ろで組み、地面に伏せた

何だか少年少女の笑い声が聞こえる

少年兵の基地か？と頭を動かしていると

「と何やら少女が服を引っ張っていたので、身体を起こすと」

いきなり少女はキスをした

「な！」

チップ目的かはたまた別の目的かは知らないがいきなりキスをされるものだから驚いてしまった

「があ！」

干上がるような体の熱と削られるような左手の痛み 薬物か？

いやしかし、そんなものは飲み込んでいない

「

」

また何か言っているようだが通じて無いのが分かってないのか？
「ぐっ、ぐっ、」

そこで気絶してしまつて覚えてない

契約の日の夜

次に目を覚ますと見慣れぬ部屋に居た

「
」

また何か言っているが、分からないものは分からない

おそらく、大陸を発見した航海者はきつとこんな気持ちだったのだろう

「ああ君。はじめまして。Nice to meet you. Nice to see you. reencounter. Nett, Siボウ
ン！！

少女はいきなり爆発させた 何を？は知らないが何かを爆発させたに違いない

「挨拶は人と人とを繋ぐ架け橋だと、思っていたんだけど思い違
いだったみたいだ」

「わかる！わかるわ！！」

「おや？右に同じく、なんだ。標準語を話せるんじゃないか。ま
ったく」

「変ね。沈黙の呪文だったのに、」

挨拶しようとしたら沈黙の呪文って、、殺伐とし過ぎだ

「アンタ名前は？」

「僕かい？僕はエドモンド。エドモンド・クレイヴン」

「エドモンド？」

「それよりも、ここは？見たところ独房じゃないみたいだし、」

「私の部屋よ。私に召喚された使い魔なのだから当然でしょ？」

「ハハハ。面白い事を言うね」

……………少女説明中

「なるほど。つまりこの地はハルケギニア大陸なる場所で、この建

物はトリステイン王国が建てた魔法学院と。そして、君はそこに通う女生徒、で間違いは？」

「無いわ。そういえば私の名前は言っていなかったわね。私はルイズ・ルイズ・ド・ラ・ヴァリエールよ」

「ふむふむ。となると僕はミスルイズが召喚した使い魔と一緒に空母まで持ってきたと、」

「あり得ないが、現実的に考えると空母を内陸まで持ってくる＋乗員を消す　なかなか信憑性が増してくるな」

「はあ、、、どうして私の使い魔が平民なのよ。ドラゴンとかグリフォンとかもつかっこいいのが良かったのに！」

「一つ聞くけど、ドラゴンやグリフォンは存在しているの？おとぎ話じゃなく？」

「当たり前でしょ？」

「いつ見られる？どれくらいの大きさ？鳴き声？」

「五月蠅いわよ！明日タバサに頼めば見られるわ。大きさは少なくともアンタよりは大きいわ。鳴き声は知らない」

「律儀に質問に返答しているところを見ると捕まる心配は無いようだ　それよりもこの女の子が言っている事が本当なら相当未開の地に足を踏み入れたことになるな」

「どうする？どうすればいい？アレクシア」

契約の日の次の日

彼女の遺体を見ることは無かった 葬式を執り行われることも無かった

「、、、、理不尽だ」

洗濯しろと言われた物を見たが洗濯機も電気もないのにどうしろと？

「まさか、手洗い？、、、、なあ？選択なんかやったこと無いんだけど」

「誰がアンタを養うと思ってるの？」

「さいですか、、、、」

未開の地に理屈は通じないらしい 軍人を殺してた日々が懐かし
いや

「それと、アンタの服も洗っておきなさいよ？血がついてるじゃない。怪我は無かったみたいだけど」

ああ レナードの血か 明日だ明日

立ち上がり夜空を窓辺から見上げる

「なあ。月が一つだけだったらどうする？」

「はあ？バカなこと言ってるんでないで寝なさい」

此処では月が二つが当たり前か

どの世界にも月が二つに見える観測ポイントなど無かった筈
明
日
考
え
よ
う

……………少女就寝中

「朝だよ。ほら起きた起きた」

「？アンタ誰？」

「記憶喪失か？はい制服」

「ああ。使い魔。昨日召喚したんだっけ、下着は？」

「下着も？はいはい」

この女の子の方がまだ彼女の朝より良いかもしれない 彼女の朝は部屋を片付ける事から始めなければいけなかったからな

「どうぞ。下着はこれで良かった？」

「ええ。でも、下着の場所。良くわかったわね」

「昨日は君が寝た後、この部屋を隈無く物色したからな」

「そう。じゃあ着せて」

いや、彼女より駄目だな

我が儘だな

「行くわよ。朝食に」

.....移動中

「なかなか豪勢ですね」

「早く椅子を退きなさいよ」

「はいはい」

下に皿があるところを見ると僕の食事じゃないらしい

「じゃあ僕は別のところで食事してくるよ」

「どこへ行くつもり？」

「空母の中の食べ物食べてくるだけ」

「いいから此处で食べなさい」

はあ 何が出てくるのやら

結果、干からびたパンでした クソ！

「本来なら食事中は使い魔は外で待機しているものなのよ」

「あんな干からびたパンを食べる為に恥を忍んだというのに、空母の食事のがおいしいぞ」

そういえばポケットにガムを入れていたことを思い出し、噛み始める

「我が儘言わないの！平民なんだから仕方ないでしょ？」

「軍人は死地に赴くのだからと設備を良くしてもらっていたのに、料理も美味しいのに、」

「わかったわよ。今度からそこで食べればいいじゃない」

少しづつ、自由を得られたエドモンドだった

契約の日の次の日の午前

「おや？みんな集まってるね」

「ああ。今日は2年生の授業はお休み。召喚したばかりの使い魔と「ミニニケーション」を取るのよ」

「まるで飼い主とペットだね」

「間違ってるわい。私が飼い主。アンタはペットよ」

「そういうプレイは好きじゃないな」

「あら？」

後ろを振り返ると黒人女性と奇々怪々な生き物が居た

「これは、なんとも、」

「あら。貴方はサラマンダーを見るのは初めて？」

「ああ。なるほどサラマンダーというのか、」

ニヤニヤと黒人女性はルイズを見上げる

「私の使い魔より貴女の 平民の使い魔の方が話題になってたけどね」

どこにでも中傷と侮蔑はあるもんなんだなと考えさせられる

「余計なお世話よ！私はちゃんと召喚したのにコイツが変なのに乗って来ちゃっただけよ！」

あくまでも他人のせいと言いたがるのが上流階級か これもどこも同じだな

立ち去る黒人女性を見ていると

「ぼさつと突っ立ってないでお茶くらい持ってきて！！」

お茶くらいと言われても、艦の出口にロープを結ぶとコーヒーマーカ―片手に帰ってきた

行こうとしたときすぐ目の前で口論になっているのに気付く

「このケーキ、髪の毛が付いているじゃないか！」

「ち、違います。わ、私の髪は金色ではありません」

「ほお？平民の分際で口答えか！」

身分階級の違いのせいで物も言えないなんて許せなかった

「まあまあ。冷静に冷静に」

「なんだ？君は。ふん。ルイズの使い魔じゃないか。平民が平民を助ける。同族愛か？」

カチンときたぞ小僧

「そうだ！悪いか？女を口説く男が女を泣かす貴族とは違うのだよ」
「なんだと？」

「どうした？さすがに怒ったか？残念だが君は貴族であっても紳士ではなかったただそれだけだ」

「どうやら、君は貴族に対しての口の聞き方を知らないようだな」

「少なくとも小僧。お前を貴族とは認めん」

「決闘だ！」

「いいぞ。相手してやる。僕が勝ったら君に紳士としての在り方を手ほどきしてやる」

「では、僕が勝ったら君は一生物の辱しめを受けてもらう」

「万に一の確率であり得ないけど了承したよ」

「ヴェストリの広場で会おう！」

「フッ、」

契約の日の次の日の午前の続き

「何やってるのよ!」

「何って、」

「何勝手に決闘の約束なんてしてんのよ!」

「もしかして、駄目だった?」

「当たり前でしょ?」

腕を引つ張りながら言う

「どこへ行くつもりだ?」

「ギーシュの所よ。今ならまだ許してくれるかもしれない」

ルイズの引つ張っていた腕をほどく

「僕は平民だ。だけど、何もしない平民とは違う」

「アンタは何も分かってない! 平民が貴族に勝てるわけない! 怪我で済めば良い方なんだから!」

「では、僕は例外だな」

「ふざけないで!!」

「君こそふざけるな。僕を過小評価し過ぎだ。これ以上何か言うなら僕が勝った時、君はメイド服でご主人様と言わせる罰をつけるぞ!」

「真面目な顔でふざけたこと言わないで! いいわ。ギーシュにボロボロにされてくるといいわ。」

「了解」

計画通り 怒ると周りが見えなくなる癖は早く治した方がいいぞ
フハハハ

「ヴェストリの広場はどこだ?」

「ああ。あっちだあっち」

.....

「逃げずに来たことは誉めてやろう」

「まったく嬉しくないぞ」

「くっ！、、僕は青銅のギーシュ！よって青銅のゴーレム ヴァルキューレがお相手する」

おそらく、誰もが一撃のもと、倒れ伏す事を想像していた

「はああ！」

ゴーレムは沈黙した。ただ、相手が悪かった。軍人専門の殺人者が左ストレートくらいでやられる訳がない

あっけなく左腕を掴まれ、背負い投げをされて地面に倒れると左腕はエドモンドの右足によってへし折られた。仮に金属だとしても青銅の強度は鉄より弱い。さらに、中が空洞なら尚更弱い。

「ふん！」

頭を踏み潰すと槍を拾い上げ

「これじゃあ普通の人間の方が強いぞ」

言い放つ

「くううう！」

ギーシュは六体のゴーレムを召喚し、攻撃を仕掛ける

.....

「当然の結果だ」

最後まで立っていたのはエドモンドだった

「ま、参った、、」

しかも無傷で勝利した事に周りがついていなかった

「これが、エドモンド中尉の力だ。わかったか坊主！」

小話

「中を見てみたい？」

「ええ。ギーシュ君も非常に喜んでいましたからね」

「コルベールと名乗る教師は何やらあの母艦が気になるようだった
「良いですよ。勿論」

.....
「これは凄い！」

「まだ入り口ですよ？」

「いや、しかし、この建物は見たことがない」

「ハハハ。これは建物じゃないですよ」

「え！これは建物じゃないのですか？」

「ええ。これは船ですよ。海に浮かせるやつ。最新型でね」

「これが、船。何の目的で作られたもののですか？」

「戦争です」

「戦争、ですか、」

「見ただけでわかる 不快な顔をしている」

「正式名称強襲揚陸艦型母艦。人員の大量動員を想定に入れた、今回の大戦初の始動となった母艦です。人員は約2000人。別称アトランティス大陸と呼ばれています。陸・空・海全てにおいて完璧な母艦です」

「大戦、つまり、貴方は軍人なのですか？」

「勿論。軍人を殺す軍人です」

「含んだ言い方だったが指摘はされなかった」

「君以外の人達は何処に？」

「分らないです。気付いたら自分しかいなかったから正直知らないです」

「そうか、」

「案内しますよ。ついてきてください」

.....

各施設はあるにはあるが、やはり倉庫の広さは尋常じゃなかった

「これは、一体」

「ここには戦車や、装甲車があります。もっとも、使われる事は無かったですけど」

「これは動いて何日が経ったんだい？」

「、、3日ですね。後はこの世界きたので、、まあ原子力だけで動いている訳では無いので動いてますけど」

「原子力ってどんなものなんだい？」

.....

誰が予想しただろう艦の改造計画の発端となった日だった

決闘後日談

「今日君をここへ呼んだのは他でもない。紳士としての在り方を手ほどきしてやるためだ」

「分かっているよ。早く始めたまえ」

、、今日この日を境にギーシュは生まれ変わった　そう彼の紳士道を聞いて、、

「感激いたしました。その心、その精神。弟子にしてください!!」
「良いだろう。しかし、既存の考えは捨てることだ。そうしなければ先はない」

「承知しました師匠!」

「これから君も彼女の意味を継ぎ、頑張ろうじゃないか!」

.....
ギーシュの改造も始まりを迎えていた

.....
そんなある日の出来事

「、、もう無理です!」

「始めて半日と経ってないぞ。4日の間ずっと自給自足で生活するだけだ。彼女の意思を継ぐためにもあらゆる立場の人間になりきってみなければならない」

「、、、、わかりました師匠」

「では、まずトラップを仕掛けよう。食料の調達と寝床の準備は何としても初日で終わらせなければ」

トラバサミは持っていないので古典的なロープで吊り上げる方法のトラップを準備し始める

「これで終わりかな」

数ヶ所に仕掛けると罾を置き、結果を待つ

「そのうち捕まえられるだろうから先に寝る場所を作ろう」

「わかりました師匠！」

寝床といっても木を切り倒し、それっぽくした簡易的な物だった

「、、そろそろ見てみよう。何かいるといいな？」

「はい」

結果としてはあまり良いものではなかったが、貧しい人はこれくらい食料をご馳走と言うのだとギーシュに言った

「、、降ろせ人間。降ろさねばグールにしてやるぞ」

「ギーシュ。これは一体？」

「、、あまり信じたくないが、吸血鬼のようです。グールって言っていますし、、」

吸血鬼なる少女はこちらに睨み付けたまま何も話さない

「吸血鬼君。君の名前は何だね？」

「黙れ。降ろせ。童貞。イポ」

自然と拳に力が入る「師匠！忘れたのですか！花はトゲがあっても愛でるものと、、そう言ったじゃないですか！」

「、、すまない。我を忘れていたよ」

「どうでも良いことをべらべらと喋るなよ。早く降ろせ。二匹の童貞臭が鼻につく」

「師匠。止めは僕が」

「まてまて、この木の葉を切り、照らしてやろうじゃないか。日が当たらないのは悲しいだろう？」

教師達の考察

時は決闘前へと遡る

「失礼します」

「どうしたのかね？ミスタコルベール」

「いえ、ミスヴァリエールの使い魔の事なんですが、」
「使い魔がどうかしたのかね？」

「平民、という事なのですが、」

「ふむ、平民の使い魔など前例が無いな」

「そんな事よりも使い魔のルーンに見覚えがないもので、調べましたところ、これに酷似しておりまして、」

コルベールが開いた一冊の本 それは始祖ブリミルにまつわる本であつた

「！、ミスロングビルすまないが席を外してくれんかの」

「わかりました」

自らの秘書を退室させるという事はそれほどの重要性を加味したモノだということだった

「オールドオスマン！！教師達が生徒達の決闘を止めるため眠りの鐘の使用許可を求めています！！」

勢いよく開かれた扉からロングビルが出てくるとマジックアイテムの使用許可を求めた

「、誰と誰が決闘しておるのじゃ？」

「ミスタグラモンとミスヴァリエールの使い魔です！」

「、、」

オスマンはコルベールを一瞥すると

「許可は出来ん。禁止されとるのは貴族間のみじゃからな」
「、、、、わかりました。伝えておきます」

.....
「つ、強い」

生身でメイジに立ち向かうとは、、と驚愕させられた
「確かに、、これは、、その通りかもしれんの」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1097ba/>

ゼロの軍隊

2012年1月8日21時47分発行